
メガネと天狗の山

五目御飯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メガネと天狗の山

【Nコード】

N4939Z

【作者名】

五目御飯

【あらすじ】

地に足が届かない女子中学生と、空気の存在感を誇る天狗が、同棲しているらしい。彼らの日常を観察・記録をするため、筆者は立ち上がった。得た情報は適宜読者の皆様にお知らせするとともに、彼らの生態系を詳細に研究していく所存である。どうにもつまらない結末になりそうであるが、少しでも興味を持った同人は付き合っ
てほしい。今 筆者の冒険が始まる。

イ（前書き）

筆者は決意したのだ。タイムマシンに乗り、天狗が現れた時代へ旅立った。空に閃光が！「ドーン」という音に驚きを隠しきれないまま、筆者は口を開いたまま、呆然と空を眺めていた。天狗である本物だ。誰か偉人が亡くなったのか、天変地異の前触れか、幼児が病気なのか、おめでたなのか。筆者は天狗に駆け寄った。倒れる天狗。危険を顧みず、それに近づく筆者。天狗からは煙があがっている。「大丈夫か」「大丈夫だ、問題ない」。ブイサインを返す天狗。苛立ったので、取り敢えず蹴っておく。それから、その天狗の姿を見かけたのは、ある山中を歩いていたときであった。これは…跟けるしかない！

イ

ナキは非常に困っていた。
人の子が懐いてしまった。
人の子はナキに抱きつき、こつこつのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ」

ナキは非常に困った。
なぜなら、彼は天狗だから。

彼は、一刻ほど前である。
ナキは山中を散歩していた。
久々の外出であった。
冬の風が頬に当たる。冷える身体を包むように、ナキは両二の腕
を持つ。

本当は、祠の奥で休んでいたかった。
しかし、そもいかない、用事ができてしまったのだ。
人間様に呼ばれてしまった。
山神たるもの、人がいてこそ存在できる身。
お呼ばれされたからには、行かねばならぬ。

“山神”と言ったものの、天狗という存在は、まあ不思議なもの
である。

神という人間もいれば、物の怪と呼び、避ける人間もいる。
善か悪かといわれると、どうにも首を傾げる存在。

生き物であるかも定かではない。
ただ、腹は減るらしい。

さて、話は戻る。

自分の名を呼ぶ人間の様子を見に、祠を出た。
どうやら、自分の名を呼んだのは童子らしい。

童子は社の前で泣いていた。

華奢な身体は、ちゃんと仕事ができるのかと尋ねたいほどである。
華奢というより、痩せ細った、と表現した方が正しいかもしれない。

「おれを呼んだのはお前か」

上から目線の、低い声。見下した目は童子を睨み付けているようである。

別に、そういうつもりはないのだが。

「ああ、来てくださった。うれしゅうございます、ナキさま」

「用件を述べよ。おれは頗る眠い」

ナキの登場に感動していた童子は、心底驚いていた。
天狗も寝るのだ。

「迷子になってしまいました」

なんとということか。

迷子になったからと、呼び出されてしまった。

さっさと童子を人里に帰し、自分も帰宅して飯食って寝よう。ナキは今後の予定を組んだ。

「お前の里はいずこに」

問うと、童子は谷を指して「あの辺りです」と言った。
苦手な里であった。

あそこの住人は、どうも気性が荒い。
空腹に耐えかね、里に下りると、彼らは石を投げてきた。
飢饉であったこともあるだろうが、そこまで露骨に追い出そうと
しなくても。

ナキは以降、あの里に下りることを避けている。
まさか、このような形で再度訪れることがあるとは。

「よろしい。目を瞑りなさい」

童子が目を瞑ったことを確認。

ナキは童子を抱え、里まで飛んだ。

久々に飛ぶと、気持ちのいいものである。

引き籠り生活が長すぎたようだ。

食料は山の動物が持ってきてくれるため、生きるに困らない。
墮落した生活を送っていた。

ナキは童子を里の入り口で降ろした。

目を開けるよう言うと、童子は素早く、目を全開させた。

大きな目がこちらを見つめている。

ナキはたじろぎ、目を逸らす。

視線は止まない。

「なんだ」

我慢できず、こちらから声を掛けた。
すると、童子は言ったのだ。

「うちな、ナキのお嫁さんなるわ！」

どういうことだろう。

厄日なのか。今まで墮ちた生活を送っていたことに、天災がやってきたのか。

天狗そのものが天災であるはずなのに、どういうことだろう。

この里の人間は、どうもこの天狗を困らせてくれるらしい。

敬語もどこかへ行ってしまった。

「ああ、その。反応に困るから、そういうことは」

「天狗様がうちに来られたら、母上もお喜びになる！」

童子と思っていた人の子は、どうやら女であったことが今更発覚した。

さておき、事情が呑み込めない。

「どういうことだ」

「天狗様が家にいると、その家は裕福になるのです。昔からの言い伝えです」

座敷童かなにかと勘違いをしているのではないだろうか。

だが、座敷童は家の守り神であり、裕福にする神というわけではない。

この里だけに伝わる話だろうか。

そんなことはどうでもいいのである。

ナキはそろそろ、空腹と眠気のダブルアタックに倒れそうなのだ。帰ってもよいだろうか。

「うちの家は貧乏でな、畑はよう荒らされる、男手はおらん、女兄弟ばっか。母上も床に伏せ……」

彼女は顔を伏せ、鼻をすすりはじめた。

泣いている。

女の泣き声は苦手である。

ナキは彼女の頭の上に、手を乗せた。

すると、瞬時に彼女の手がナキの手首を掴んだ。

油断していたこともあり、引つ込める暇もなかった。

「というわけで、どうかナキ様、天狗様。うちの家に来てくれん？」

嘘泣きであつたらしい。

大体の人間は、泣けば顔が赤くなるものだが、この娘の顔は先程と変わっていない。

元気で、明るい笑顔が、こちらを見つめている。

とはいえ、言っていたことは事実らしく、やせ細った手足は、見えて折れそうで怖い。

なんとかしてやりたいと、ナキの良心は訴えている。
だが、こちらも非常事態なのだ。

「すまない」

ナキは、彼女の顔を見ずに、小声で言った。

謝罪の言葉は、彼女に届いていただろうか。

確認する余裕もない。

ナキは、人の子を置いて、山へ帰った。

また、飯食つて寝たら、来るから。

なんて、自分勝手なことを発言することはなかった。「また来る」

とも言えなかった。

言えば良かった、と後悔したのは、祠で遅めの朝食を摂っていた時であった。

口（前書き）

現代日本に帰ってきた。時は2011年12月。冬至も近づくある日のことである。ある女子中学生を見つけた筆者は、彼女を追尾せざるを得なかった。眼鏡をかけ、髪を二つ括りにした美少女であったからだ。これは追尾せざるを得ない。セーラー服が良く似合っており、いい匂いがしそうであるが、近づく勇氣は無い。すると、まさかの目標確認。筆者が追っている例の天狗の登場である。美少女戦士の前に黒いタキシードを着たイケメンが、などという展開ではない。寧ろ、筆者としては悪役がやってきた気分である。「ろっとお、驚かせてしまったな」「これは何だ」「それは昨日言っただろう」。

□

華子は咄嗟に耳を塞いだ。

突然の爆音である。

同時に、空中で何かが爆ぜた後があった。

青い光の線が、重力に引かれるように地へ向かっている。

「うわ：花火かな」

華子は訝し気にその空を見ていた。

周りの人も華子と同じ方角を見ている。

自分だけが見た、錯覚というわけではないようだ。

新聞の夕刊を見れば正体はわかるだろう。

それだけでなく、インターネットを使えば、あれが何であるか分かる。

便利な世の中になったものだ。

津久井華子。中学生である。地元の公立中学に通う、帰宅部の少女だ。

容姿のせいか、「頭が良さそう」だと言われることが多い。

実際は、通知簿が家にやってくるたびに、親が冷や汗をかくほどの成績である。

第一印象が「頭が良さそう」であれば、得をすればする。

たとえば、試験の面接などがそうだろう。

ただ、長く付き合うだろう相手に「頭が良さそう」などと言われた日には、華子は困ってしまう。

相手の期待を裏切る真似などしたくない。

とはいえ、勉強なんてやってられない。
少し、不良っぽく装ってみようか、などと考えた。
それは親の期待を裏切ることになる。
華子は溜息を吐いた。

放課後である。

帰宅したところで、華子がすることは、自分の夕飯作り。
洗濯物も取り込まなければならぬ。

その前に夕飯の材料は家にあっただろうか。

華子は「家に帰りたくない」の一心で神社に足を向けた。
中学生になってから、学校のある日はいつも通っている。
どうせ、帰ったところで両親はいないのだ。

両親は各々別の地へ単身赴任中だ。

と言えば、華子の両親に非難の声が行きそうである。

彼女の両親は悪くない。

なぜなら、彼女の両親は別に単身赴任をしているわけではないの
である。

華子の両親は自宅から職場へ通勤している。

二人とも朝早く出かけ、夜遅くに帰宅するため、自分の身の回り
のことは自分でしなければならぬ。

物に不自由をしないところは、一人暮らしと異なる点だろう。

そんな前振りの話はどうでもよい。

華子は神社のお宮の前にある階段に座った。

缶コーヒーのタブを立て、元に戻す。

そして、口に運ぶ。

二、三口飲み「あゝあゝー」とかオジサンのような声を出す。

これが彼女の日課である。

恋する年頃になれば、オジサンのような声を出すことはなくなるだろう。

だが、しばらくこの日課は続く。

両親が仕事を辞めることはきつとないし、引越す予定もないのだから。

「暇だー」

華子は缶コーヒを脇に置き、階段に座ったまま背伸びをした。

両腕を上げ、思い切り伸びる。勢いで目を瞑る。

気持ちがいい。

一日の癒しタイムである。

瞑っていた目を、徐に開く。

「うわああああ!!」

華子は声を上げて階段から離れた。そんな。

立ち上がれ切れてない体勢のまま、気合で移動したため、勢いで尻もちをついた。まさか。

見間違えかと、目を擦るが、それは、そこにいる。

「は、羽」

声が裏返っている。

そんなことを気にしている場合ではない。

目の前には、ひょっとこの仮面を着けた人がいた。

その背には羽がある。黒い、鳥の羽のようだ。

「そう逃げないでくれよ」

目を開けると、眼前にひよつとこの仮面。驚かざるを得ない。逃げざるを得ない。

まじまじと、ひよつとこを見る。全身を見る。

ひよつとこの仮面を着用しているという点と背中黒い羽以外、異常な個所はない。

いや、十分異常か。

それらを除けば、自分の父親に似た、細身の成人男性。といった感じの印象である。

「恥ずかしいから、あまり見ないで」

なんだ、こいつは。

声の低さから、男性だと窺えるのだが、なんだろうこの気持ち。

「きもい」

そうだ。気持ちが悪い。「きもい」と略したニュアンスの方が近い。

声に出して分かる、自分の気持ち。

「酷い」

ひよつとこは、両手で拳を作り、合わせた。それを自分の顎のあたりに寄せる。

わあ、気持ち悪い。

「いやあ、久々に空飛んでたら、制御利なくなっちゃって」

ひよつとこは後頭部を搔く真似をする。

華子に近づき、左手を出してきた。華子は思わず、自分の左手でその手を持った。

強い力で引つ張られ、立ち上がる。

大きい。華子の感想である。

ひよつとこは仮面を着けているため、どんな顔をしているのか分からない。

「空、飛んでたって」

華子は訊ねた。気になる単語である。

飛行機が墜落したのだろうか。それでこの雰囲気。ありえない。

別の可能性を考える。

先程の爆音を思い出す。

いや、違うだろう。

考えを巡らせる。

それに終止符を打ったのは、ひよつとこからの告白であった。

「おれ天狗なんだけどね。しばらく引き籠ってて、空の飛び方忘れちゃったの」

ひよつとこはおどけてみせる。

仮面に右手を掛け、左手で耳に掛けていたゴムを外す。

まさかの「おれ天狗」発言に呆然とする華子。

さらに露わになった天狗の素顔に、華子は声が出なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4939z/>

メガネと天狗の山

2011年12月17日02時04分発行